

041218 M1 開発者インタビュー・金子 昌平氏 at 筑波保存棟

インタビュアー：中村 政人 アシスタント：福田 啓作

中村（以下、N）：まず、入社される以前の大学でのご専攻、及びご入社後、M1 開発までの流れについてお聞かせ頂ければと思います。

金子氏（以下、K）：大学の専攻は応用化学です。たしか卒業研究は、潤滑油の合成かなんかをやって、ハイムとは全然関係なかったですね。それから、入社後は開発調査部というところにいまして、そして新商品や新事業のネタを、海外文献や特許情報等をもとに探索をして、その商品化をするというような仕事を広範囲にしていましたね。それくらいかな。簡単すぎますか（笑）？

N：いえいえ。その後 M1 の事業を展開するにあたって、住宅事業推進本部設立の契機や当時の雰囲気を教えて頂けますでしょうか？

K：あとで振り返ってみると、ということになりますますが、2 つあったと思うんです。一つは、社内的な背景、そして 2 つ目は、その時代の社会とか環境がもたらす背景、この 2 つだったと思います。まず、社内的背景でいうと、私は昭和 39 年に入社したんですが、会社は昭和 40 年頃、経営危機に陥り、だいぶ苦しみました。どうにか、2～3 年位で建て直しにめどをつけ、再建から前進へと、将来に向けての新経営計画が立案されたんです。そういうことで、新しい事業をともかくやらなければいけないというのが、まず 1 つありましたね。それから、当時の社会的背景っていうのも非常に大きかったと思います。日本が高度経済成長期を迎えていくわけですが、都市への人口集中、特に若年層が入ってきたので、その人達が家庭を持ち、所帯数が急増しました。それで日本中どこでもそうだったんですけれども、特に都市部で住宅不足が起きました。そういった状況の中で、大量の住宅を供給して行かなければいけないという背景がありましたけど、在来の大工さんだけではどうしても充分でないということになりますよね。そこで、在来の他に、新たな住宅供給を必要とする必然性が生まれました。そうした中で、新規産業として、住宅産業への期待が高まってきた訳ですから、住宅事業への取り組みはごく自然だし、グッドタイミングだったと思いませんか？

N：建築専門の方が不在のまま、プロジェクトチームが立ち上がったということでしたが、M1 の開発事業を進めていく上で不安等無かったのでしょうか？

K：我々の多くは 20 代で、上のほうの人でも 30 代の初めでしたから、多分僕だけではなくて、みんな一切不安はなかったと思いますね。新しいことができるということのほうが面白くてね。たしかに大学で勉強したことと、自分達が当時やろうとしていたことは全然違うものでしたけれども、少なくとも僕は、あまり抵抗は無かったですね。開発調査部にいたというせいもあるし、当時 FRP の製品作りのようなこともやってたので、そういうものも活かせるかなあということですね。ですから、転勤も一切深刻にならなかったし、海のものと山のものとも分からない事業に参加するんだといった意識は全然無かったですね。これは、みんなもそうだと思うんですけども。

N：大野さんが大学院を卒業されるかされないかの頃で、他の開発者の方も 20 代の人が多かった。それ程若い人たちが開発に携わるといこと自体が、現在からは考えられない気がしますが。

K：ただね、積水化学、そのものはそのとき非常に若い会社でね、4～5年経つと係長くらいにどんどんなるという感じで、上もないし、ある意味でそうせざるをえないせいもありますけど、任せざるを得ないという状況もありましたよね。だから、自分が若いからという意識は全然なくて、上もないし、ある意味で、自由に素直にできた良い時代だったかなと思います。

N：大野さんが示された開発コンセプトを事業中に組み込んで、実際に展開していくまでのスパンが 2 年位だったと伺っています。開発手法の中でも色々な方向性があったと思うのですが、この方法に収斂されてきたのはどのような要因によるものなののでしょうか？

K：多分、建築も何も知らなかったというのが大きかったかも知れませんね。変に知っていたら、かなりオーソドックスな攻め方をして、もう少し時間もかかったでしょうし、全然違うものになっていたかも知れませんね。既に積水ハウスがあったので、最初は別荘を前提にスタートしたんですよ。段々、住宅をやりたいという気持ちに傾いていったけど、積水ハウスと同じ住宅をやるのは許されない。そこで出会ったのが大野さんだったというわけです。大野さんの『部品化建築論』に初めて接したとき、《集積しやすい部品の設計・生産、これらを効率よく集積化する生産技術》これによって今までにない価値ある工業化住宅を作り上げるんだと、勝手に解釈して、独り力んでいましたね。大野さんの主旨に沿っていたかどうか、今になっては自信がありませんが、その時の力み振りとは、感激を忘れませんね。

N：今振り返ると、M1 は非常にシンプルですよ。そして、そのシンプルさというのが非常に精神的なものを帯びているような感じがします。M1 には、作っている人の気持や精神を感じるの、私は美術家としてこの精神を受け継ぎたいという風を感じています。ですから、単純に建築的要素に還元できない、何か「強さ」を感じるんですけども、その辺りについてはどのように感じられますでしょうか？

K：僕もね、実際にプロジェクトに参加している際に、凄くそういった意識を持って設計や開発を進めていたかどうかは疑問なのですが、振り返ってみると、M1 の精神性というのは合理性という部分にあるのではないかと、思うんですね。求められる住宅施主の価値を最大限に発揮させる手段として、我々は合理性ということをベースに、1 番求めやすい価格で住宅の供給を図っていく。そこが、ある意味でプロダクトデザインに近い世界で住宅を考えていった点かもしれませんね。今まで、家というのは「建てる」という言葉を使ってきました。我々は「作る」とか「買う」とか「売る」とかことで、この家作りをやっていたように思いますね。ですから、部品と部品を乾式で接合していくという考え方があって、今日、この保存棟を見ると、所々初期の作り方と違うものがあるように思いますね。この階段もそうなんです。僕が設計した階段とは少し違っているように感じますね。といい

ますのは、この階段のデザインに取り組んだ時には、この住宅の理念や狙い、外観など、いわば原点的なものは出来上がっていましたから、この原点というか、精神性といったものに沿ってやりたいと思いましたね。少なくとも、大工さんがやるものとは違うものを、とね。もう少しオブジェ的だったんですね。ですから、階段下の収納はなく、全部オープンで、階段の鉄骨がグニャッと曲がって、という感じでしたし、階段の板を支える鉄骨の部分ももう少し小さかった気がしますね。

N：では、こちらの保存棟の仕様は、当時のデザインと少し違うんですか？

K：いや、普通の人にはほとんど同じじゃないかと思うはずですが、やはり階段下に収納も欲しいということになって、階段下収納が出来て、収納確保という意味ではこういう形になっていくのかな。

N：このプロジェクトの中で、具体的に担当された箇所は階段だと伺っていますが。

K：階段とね、僕は床の間や押入れも含めた間仕切りシステムを担当したんですよ。ただ、最初の1~2棟に関しては、間仕切りといってもずらした所に壁がある程度で、この保存棟のようなものはなかったんですよ。押入れもね、この保存棟のように建物と一体ではなくて、もう少し部品個々が、モジュールとして存在感があって、それが集積して全体のシステムを構成しているような雰囲気が強かったんじゃないかなあ。

N：では、再現棟としては、初期状態ではないんですね。

K：僕自身もね、何年も前のことだしね。発売が昭和46年で、46年の終わりか47年頃には、SKプロジェクトというのを川崎製鉄と一緒にやるということで、私はそちらのプロジェクトに移ったので、その後、最終的に商品化する段階で、作り易さや使い易さという観点から手を加えられたのではないかと思います。

N：M1開発のプロセスの中で、ご苦労なされた点等がありますでしょうか？

K：何かの本にも出ていたと思いますが、ちょうど先程の時代背景の中でもう1つ大きな要素が、第1回国際グッドリビングショーと、パイロットハウス考案競技でした。それらに間に合わせようということで、それ以前まではあくまでも社内向けのプレゼンテーションだったのですが、今度は外へのお披露目でしたし、実際に商品にしていくということになると、日本の狭小敷地という条件の中で必然的に2階建てになりますよね。2階にも間仕切りをつけろということで、半年もない中でそれを一気にまとめて、その間はとてもハードだったと思います。ただ、不思議なことに、商品の開発をやっている連中は自分のやったことがある程度成功してしまうと、それまでの苦労は苦しみとして残らなくて、出来上がって形になってくる訳ですから、これの喜びの方が大きかった気がしますね。それから、みんな若いですから、仕事が終わってからみんなで飲んで、大野さんも結構付き合われていましたけどね（笑）。もちろん、構造試験を奈良工場で行った時は、確かみぞれ混じりの中で、冷たくて耳がちぎれそうになったこともありましたが、全て新しい経験じゃないですか。後で考えると、大変だったという感じがあまり残っていないですね。

N：M1の命名というのは、どなたがされたのでしょうか？また、M1のそもそもの意味と

いうのは・・・。

K: モジュールとかモデル1とか。

N: 正式には？

K: 誰がつけたのかなあ。たしか、ハイム2番目の商品を上市した時に、モデル1として「M1」、2番目の商品が「M2」とされたように記憶していますけど。「雅」などをつけるより、「モデル1」とか「プロトタイプ1」とか言う方がいいですよ。家の供給の仕組み等、新しいことを試みて、商品化住宅という概念で家を生産・供給していこうとしたのは、このM1が初めてだと思う。それまでの住宅にブランドという考えはなかったと思いますが、ブランドをきちっと構築し、住宅供給にマーケティング手法を導入して事業展開をしたのも、新しかったと思っています。

N: その後、M1→M2→M3と展開されていく流れというのは、どのようなものだったのでしょうか？

K: M3くらいからは、ユニット住宅の思想は違ったものになったかもしれませんね。ただ事業としてはね、対応性を高めたM3の出現でボリュームゾーンの獲得や、事業規模の拡大に結びついたのだと思いますが。当時の私は、自己完結型ルームユニットの集積された住宅こそ、ユニット住宅であるという思いが強かったので、この保存棟にある3分の2間仕切りなど、何か割り切れないものも感じながら、開発に当たっていたという一時期もありましたね。今、本音を言うと・・・。でも、住まい手が段々増えてくると、家として使い易い方がいいということになりますからね。

N: 現在、M1がDocomomoに認定されたことで、改めてM1が違う価値を帯びてくるような気がするのですが、現在から振り返って、M1とは金子さんにとってどのようなものだったのでしょうか？

K: 今日、久しぶりにM1を見て、先程少し精神性のようなことを言ったけれども、やはり合理性と機能美を純粹に追いかけて、こういうものを作ったんだなと思いました。それは、いくつかの要素が重ならなければ、こういった形の住まいは世の中に出なかったと思うのですが、そういう意味では、我々の作ったものが、ここに来て改めて認識され、そういう評価を受けるというのは、凄く嬉しいですよ。久々に見ましたが10~15年以上前に見た時よりも、ぞっと恰好いいな、と思いましたよ。以外でした。開発当初は、凄くいいと思っていたんですが、事業として成功するにつれ、現実への対応が少しずつ進み、原点的なものが希薄になっていって・・・。今の技術や材料で、もう1度きちっと同じものを作り上げるのも面白いだろうな、と思いますよ。

N: いや、個人的には絶対面白いと思います。ある意味で、時代のニュートラルなものといえますか、単にミニマルというだけではなくて、本質的なことものが内在している気がします。例えば、無印良品のようなブランドが流行っているのも、シンプルなものを受け入れられてきている結果だと思うんですね。そういう意味でM1というのは、余分なものを排除してシンプルであるか故に、住む人たちが色々な要素を足していくことができますよ

ね。ですから、私としては、M1を原点として、M1のコンセプトを突き詰める方向での商品開発は有効なのではないか、と考えています。

K:そうですね。今、何が住宅にとっての原点かと考えると面白いですよ。ここでM1を見ていて、あの頃の原点とはなんだったのだろうか、と考えさせられますね。素直に、要求されるものを直線的に作り上げていったように思うのですが。開口部にシャッターを使ってるな、と思ったのね。今、住宅にシャッターを使うのはごく自然になってきていますが、その頃住宅にシャッターを使うなんてことは無かったんですよ。僕が担当ではなかったけど、なぜシャッターにしたかということを考えると、ラーメン構造を活かして、大きな開口部をとりたいと。壁の残りの量が少ないし、多分雨戸にしたら、システムの整合性が取れないということと全体の雰囲気ということで、敢えてああいうものをつけた。ですから、屋上バルコニーも極々当たり前に見えるけど、今までの普通の住宅の中で、バルコニー的なものは、例えば屋根の上に物干し台を置くようなスタイルだったのね。しかし、M1はフラットな屋根な訳だから、1階の屋根の上に素直にバルコニーにしようと。それで、よくよく考えると、三角の屋根の雨仕舞というのは割に水を流すので簡単なんですけど、フラットの屋根の雨仕舞というのはそんなに簡単ではなくて、そういうものと一体でバルコニーを作ったというのも、意外に凄いことなのかな。4箇所給湯というのも、当時の技術としては際立ったものだと思いますし、カーペットもね、M1が出た頃にカーペットをひいてある住宅というのは無かったですからね。

N:今日はどうもありがとうございました。